



## MAXIの国際会議開催される

2010年12月6日

MAXI チーム(AMM)

- 11月30日から12月2日の3日間にわたって青山学院大学の青山キャンパスでMAXIの国際会議を開催しました<sup>注)</sup>。データ取得開始から1年余りで多くの共同研究者を迎えて国際会議を開催したわけです。出席者は126名でした。
- MAXI国際会議はMAXIが「きぼう」の船外実験装置の最初の搭載機器として承認される直前の1996年以来4回目の開催です。これまでも国内外から100名前後の研究者の出席がありましたが、今回はMAXIのデータが実際に得られ、国際的にもMAXIのデータを通して研究者間の共同研究が進んでいる時期に行ったものです。
- 講演はMAXIチームの報告に加え、招待講演者と積極的に講演を申し込んだ講演合わせて37編、ポスターは69編の論文が発表されました。現在低エネルギーのX線まで感度の優れた全天X線モニターは国際的にMAXIしかないため、どの講演者もMAXIへの期待は高く、今後長く観測を続けて欲しいとの要望がだされました。
- 会議の2日目には、MAXIが10月17日に見つけた新天体 MAXI J1409-619 ([MAXIサイエンスニュースNo.023](#)) の再増光をMAXIが見つけ、Swiftの観測で~500秒のX線パルサーを見つけた速報 ([ATel#3060](#)) が発表されるハプニングもありました。

注): 会議は理化学研究所主催、青山学院大学、JAXA、東京工業大学が共催。前4機関に加え、科研費補助金と宇宙科学財団から資金の援助を頂いたことを感謝します。会議の世話はMAXIチームが行い、事務局長は三原建弘(理研)が務めました。

4<sup>th</sup> International Workshop of  
The First Year of MAXI  
Monitoring Variable X-ray Sources

2010. 11. 30~12. 2



MAXIが結果を出した第1年目の国際会議に出席した人々(青山学院大学[青山])。外国からは13ヶ国、33名の参加があり、イラン、インドネシア、メキシコからの初参加もあった。この国際会議ではブラックホール、中性子星、活動銀河の変動、ガンマ線バースト、超新星、通常の新星等に関する研究発表に加え、激変星や若い星や変光星のフレアなど各種のX線で変動する天体の発表がなされた。加えて、光や赤外線、電波による変動する天体の観測結果や理論モデルの発表もなされた。更に、変動天体を研究する進行中や将来計画の望遠鏡についての発表もなされた。MAXIチームの有志からは現在のMAXIを更に発展させるMAXI-2の試案も提案された。

現在、変動する天体を多角的に研究することは天文学の重要な分野になっていて、X線天文学はその中核の役割を果たしている。このため、MAXIの観測運用の長期継続も強く要望された。